

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21390569

 研究課題名（和文）研究成果を実践活用する方法の開発  
 —看護学におけるトランスレーショナルリサーチ

 研究課題名（英文）Development of methodologies for translating nursing research outcome  
 to practice: applying translational research in nursing.

 研究代表者 荒川唱子 (ARAKAWA SHOUKO)  
 公立大学法人福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：30291561

### 研究成果の概要（和文）：

本研究においては、看護研究の成果を実践活用できるように転換する方法をトランスレーショナルリサーチと位置づけ、看護研究成果と実践活用とをつなぐ方法の開発と活用システムの構築を目的とした。研究成果の実践活用を試みる4つのプロジェクトを組んで実際の活動を行うとともに、大学附属病院看護部に設置された看護研究実践応用センターの活動に参加し、研究成果の実践活用を推進する方法を検討した。これらの活動を通して、研究成果を実践活用することによって、臨床の看護ケアが変化していくことが明らかになった。それとともに、研究成果を実践活用するためには看護師の技術や能力の習得があって初めて活用が可能になり、実践活用するための看護師の実践能力の育成をどのようにしていくかが課題として残された。

### 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to develop methodologies for translating nursing research findings to practice and to establish a research utilization system for nurses in hospital settings. Four research projects selected for this purpose and practiced. Moreover, the researchers participated to activities of Nursing Utilization Center which was established under the nursing section in the University hospital, and discussed relations between promoting utilization of research findings and the quality of care. As a result, the quality of nursing care improved through utilizing research findings to practice. On the other hand, in order to utilize research findings into practice, development of nurses' competence and technical skills should be address prior to administrating research findings in a hospital.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護学、トランスレーショナルリサーチ

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の看護系大学の増加は著しく、平成20年4月には167校となり、看護師資格を有する看護系教員の数は5,000名を超えている。看護系大学院は、修士課程106で、定員数は1,701名、博士課程は46校で、定員数は328名となっている。この数からみても看護学の研究論文に取り組む者は、約7,000名にも及び、看護学関係の論文は、研究者の数以上に出されていると考えられる。また、看護系の学会も日本看護系学会協議会の会員だけでも33学会に及び、他の看護学に関連する学会や看護職能団体の学会まで入れると、発表される研究論文数は、数え切れない程になる。こうした看護界の動きは看護実践の質の向上に役立っていると考えられるが、その実状は把握できておらず、また、研究成果が臨床に結びついているという実感も持てない現状にある。

そこで本研究では、看護学の研究成果を実践に活用する方法の開発と活用するシステムの構築を行い、数多く生み出される研究の所産を看護実践の質の向上に役立てる方策を検討しようと考えた。

本研究においては、看護研究の成果を実践に活用できるようにする方法論をトランスレーショナルリサーチとしている。米国においては、National Institute of Health (NIH) による「トランスレーショナルリサーチとは、基礎、臨床、または疫学の研究成果を人々の健康を保持増進させるために、ケアの担い手や住民が応用できる情報、資源、用具に転換していくことである」という定義が広く用いられている<sup>1)</sup>。このNIHの定義には、実験室等で行われた基礎的研究の成果を臨床で患者に適応するという側面と、臨床研究において得られた研究成果をさらに多くの対象や場において活用していくという2つの側面が含まれている<sup>2)</sup>。看護学においてはHolzemerが「看護専門職の研究成果を看護実践に活用するのみならず、地域や人々のセルフケアや保健行動にも役立てるようにすること」<sup>3)</sup>を強調しているように、後者の側面に焦点を当てたトランスレーショナルリサーチが求められている。米国では1980年代半ばより、Research Utilizationとして診療報酬に影響を与えるような看護研究が推進されてきたという背景もあり、2000年に開催されたThe National Institute of Nursing Researchの会議において、博士課程修了者の取り組むべき研究課題の1つにトランスレーショナルリサーチが位置づけられている<sup>4)</sup>。

わが国においては、トランスレーショナルリサーチという用語は、基礎医学の研究成果を臨床に活用するための研究に用いられており、NIHの定義の前者に焦点があてられて

いる。看護師がトランスレーショナルリサーチに関与している医療施設もあるが、それはあくまでも基礎医学の分野で得られた研究成果を臨床活用していくために、患者を対象にした研究を行う際の倫理的側面の監視や、被験者となった患者に対するケアに関与するということであり、看護学における研究成果を実践活用することを主たる活動目的とするものではない<sup>5)6)</sup>。

現在、Evidence Based Nursingが提唱されている中で<sup>7)8)</sup>、研究成果と実践とを結び付けようとしているが十分とは言えない。研究成果を看護師、他の医療従事者、当事者である患者や家族が活用できるように工夫・修正し、それを利用できるシステムをつくることは急務であり、看護研究者の大きな役割と考える。そこで本研究では、看護研究の成果を看護実践に活用できるように転換する方法をトランスレーショナルリサーチとして位置づけ、看護研究成果と実践活用とをつなぐ方法の開発とシステムの構築をめざすこととした。

## <文献>

- 1) Holzemer, W. L, Translating nursing research to practice, 日本看護科学会誌 23(1), 74-82, 2003.
- 2) Chesla, C. A., Translational research: essential contributions from interpretive nursing science, Research in Nursing & Health, 31, 381-390, 2008.
- 3) Holzemer, W. L, Toward understanding nursing science, Japan Journal of Nursing Science, 4, 57-59, 2007.
- 4) Sigmon, H. D. & Grady, P. A., Increasing nursing postdoctoral opportunities: National Institute of Nursing Research spring science work group, Nursing Outlook, 49, 179-181, 2001.
- 5) 土井香・徳永尚美, リサーチナースとしての活動, 看護, 59(9)
- 6) 模索型臨床研究におけるチーム医療 トランスレーショナルリサーチ・コーディネーターの役割と今後の課題, 看護実践の科学, 27(13), 36-41, 2002.
- 7) 小山真理子, Evidence-Based Nursing (EBN)と看護実践, EB Nursing, 1(1), 18-22, 2001.
- 8) 黒田裕子・川島みどり, エビデンスをつくる看護研究, EB Nursing, 1(1), 73-79, 2001.

## 2. 研究の目的

これまで本研究者らと大学附属病院および関連病院の看護専門職と共同で手がけてきた看護研究を基盤に、その方法と課題を明確にし、研究の成果を臨床(実践)で活用で

きるようにしていくために必要となる方法や支援システムについて検討する。また、大学附属病院看護部に設置された看護研究実践応用センターの活動に参加し、研究成果の実践活用の推進とケアの質の向上との関係について検討する。

### 3. 研究の方法

本研究においては、研究成果を実践に活用する方法とシステムを開発し、看護の質の向上に役立てる方策を検討することに焦点を当てた。よって本研究は、以下の3つの側面から進めていった。

- (1) 研究成果の実践活用を試みようとする4つのプロジェクトを組み、その活動を通じて研究成果を実践の場で活用する際に直面する困難を記述・分析し、それを乗り越える方策を検討する。
- (2) トランスレーショナルリサーチの先駆的な活動について情報収集を行い、その内容を分析して研究成果を実践活用するための要件を検討する。
- (3) 本大学附属病院看護部に設置された「看護研究実践応用センター」の活動に参加し、その活動を通して研究成果を看護の質の向上に役立てるための方法を検討する。

### 4. 研究成果

- (1) 4つのプロジェクトが行った活動とその成果

【プロジェクトⅠ】統合失調症患者の地域生活の定着を目指したサポート

実践活用の方向性：開発されたプログラムを臨床状況に合わせてケアを展開する。

具体的な活動内容：研究者らが精神科病院をフィールドに開発した実践プログラム「再入院した統合失調症患者に対する症状マネジメントと支援体制確立のためのプログラム」を病床数が少なく、短期入院を余儀なくされている総合病院（大学附属病院）内の精神科病棟において活用することを試みた。病棟看護スタッフの多くは精神科看護の経験が少なく、しかも忙しさの中で業務に流されがちになっている現状から、意図的な看護を導入することによって看護師の精神科看護の専門性を高めていくことを狙った。病棟看護師にプログラムの説明を行い、該当した事例に適応したが、病棟スタッフから、プログラムの項目をどのように使えばよいのか、内容も難しいなどが出され、プログラムを臨床応用していくためには時間をかけて説明をし、個々の看護師のスキルアップを図っていく必要性が示唆された。すなわち、本プログラムを臨床活用していくためには、活用のプロセスを通して看護ケアを展開するための精神科看護の専門的な臨床能力の育成が必要であることが明らかになった。

【プロジェクトⅡ】がん患者のサポートグループ

実践活用の方向性：先行研究の結果に基づきプログラム内容の修正を行うとともに、サポートグループの院内定着を図る。

具体的な活動内容：先行研究（乳がん患者のQOL調査）の結果に基づき、患者のQOLをより高められる内容に修正を加えた上で、年間4～6回サポートグループを開催し、年間のべ40名前後の参加があった。

病院のスタッフが自分の時間を使い活動する負担を感じながらも、「継続する」ことで利用者のサポートグループへの期待やニーズが確認され、スタッフの「継続する」意欲につながっていった。そして、院内研究発表会や医師の研究会などで「活動を伝える」ことで、関連病棟・外来看護師、医師などの「関係部署の協力を得る」ことができ、サポートグループ運営の基盤は確立されたと考える。

今後は利用者のニーズを把握し、グループ活動に反映していくとともに、組織としての位置づけについて検討していく。

【プロジェクトⅢ】子どもを亡くした家族へのサポート

実践活用の方向性：既存の研究成果および先行研究（対象者へのニーズ調査）の結果を基に必要とされるサポートの導入を図る。

具体的な活動内容：子どもの看取りを経験する1つの大学附属病院内の2病棟（NICUと小児病棟）で導入を検討した。医療施設として実施可能な取り組み内容および優先順位を検討するため、看取りのケアの実態把握およびケアにあたる看護師の思いを明らかにした。その結果、家族へのサポートとしては、「家族への直接的なアプローチ」よりも、「死亡退院前までに医療施設で子ども・家族に対して提供するケア」および「看護師のグリーフケア」の充実・体系化が優先事項であることがわかった。そのためには看護師が子どもの死に準備することや亡くなった子どもをめぐる思いを表出することへの抵抗や嫌悪感を打破する方略を必要とした。「看護師のグリーフケア」の一つの機会となる「デス・カンファレンス」の導入・定着のプロセスの比較を通じて、知識の共有、ファシリテーターの育成、調整役と調整方法の明確化、安全な環境の保障およびそこで思いを表出できた体験が必要であると考えられた。

【プロジェクトⅣ】看護師に対するリラクゼーション技法の取り組み

実践活用の方向性：看護師がリラクゼーション技法を修得し、日常の看護実践の中に導入する。

具体的な活動内容：リラクゼーション法を

患者や家族に指導できるようになるためには、看護師が自分のセルフケアに役立てるように自らをトレーニングすることが必要である。そこでトレーニングを受けたいと申し出た看護師5名を対象に実践活用するための研究についての説明を行い、同意を得た後、リラクゼーション法を実施した。

最初に呼吸法に取り組んだ。呼吸法について説明後、デモンストレーションを行い、実際に行った。その様子をディスカッションし記録していくが、これを約10日間行った後にまとめて評価をした。その後、2つ目の方法（漸進的筋弛緩法）に入り10日間行う予定であったが、対象者である5名の看護師は、「疲れてできなかった」「しなければならないことがあると後回しになってしまう」「忘れてしまう」などの理由で予定通りすすめることができずに中止となった。そのために、最後に3つ目の方法として「誘導イメージ法」を10日間、実施する予定であったが、そこまでたどりつけなかった。

今回は3つの方法を各10日間行うことはできなかった。しかし、最初の対象者は、呼吸法のトレーニングの中で、自分自身の心身の状態をよく観察してリラクゼーションを継続して得られる効果や自分自身のあり方を深く考察するなどしており、肯定的に評価できる点が多くあった。今回のような長期間にわたる取り組みを継続していくためには対象者と研究者の関わり方を密にし、細かくフォローすることが必要となることが示唆された。また、取り組んでいくプロセスで対象者同士が関わりあっていけるシステムを作ることで安全に継続していくことが可能になると思われる。

### (2) 研究成果を実践活用するための要件

これまでのトランスレショナルリサーチの先駆的な活動の文献検討や本研究のプロジェクト活動を通して、研究成果を活用していくためのプロセスについて図1のようにまとめることができた。

先ず状況を共有して問題を明確にする。これまでの研究成果を検討して、問題解決に見合った方法を選んで、それを活用するための勉強会を開催し、具体的に適応できるかどうかを検討していく。この過程で必要に応じて研究計画書を作成し、倫理的な審査を受けてから実施する場合もある。

こうした実践活動の中で明らかになった

ことは、研究成果の活用には、活用する看護師に技術や能力が必要になるということである。すなわち、統合失調症患者の地域生活の定着をめざしたプロジェクトIや、看護師のリラクゼーション技法の習得をめざしたプロジェクトIVでは、実践活用するために看護師の技術や能力の習得が必要であった。図1の活用プロセスの「活用するための勉強会」や「実際に活用する」においては、実際に援助を展開する看護師の技術と能力習得のための時間が必要であり、研究成果の活用には実践できる人材の育成が必須要件となっている。

### (3) 研究成果を看護の質の向上に役立てるためのシステムの構築

本研究においては大学附属病院看護部に設置された「看護研究実践応用センター」の活動に研究者らも参加し、看護師が実践のなかで直面した課題をこれまでの研究成果を活用することによって解決していく方法を検討した。図1に示したように研究成果を実際に活用していくためには以下の点が必要になることが明らかになった。

- ①臨床で働く看護師自身が、実践の中から問題の意識化、明確化を図ることによって、研究成果を実践につなげていこうとするパワーが生まれる。したがって、臨床からの問題意識を吸い上げ、改革につなげていくことを推進するシステムを導入することは重要である。
- ②研究成果を基に作成されたマニュアルやケア手順などは、一度、導入されたとしてもそれを臨床に定着させるためには、継続的なフォローアップや組織的な取り組みが必要とされる。
- ③研究成果を活用するためには適切に研究を評価する能力が必要であり、研究の基本が理解できていることが求められる。したがって、研究成果を看護の質の向上に役立てるためには単に研究に対するサポートのシステムだけではなく、研究を理解するための教育も必要になる。

「看護研究実践応用センター」は研究成果の実践活用を推進するための支援システムの1つとして有効に活用できると思われる。その一方で研究成果の実践活用には人材の育成が必要になり、看護師の院内教育に連動していく必要性が明らかになった。この点は今後の検討課題と言えよう。

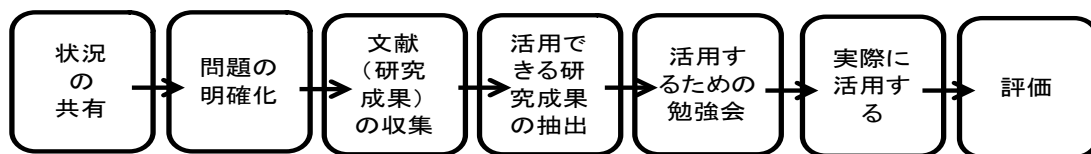


図1 研究成果の活用のプロセス

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 古橋知子, 岩井さとみ, 渡邊敦子, 大川貴子, 子どもを亡くした家族への支援に関する研究—闘病にかかわった医療者に対するニーズに焦点をあてて—, 福島県立医科大学看護学部紀要, 査読有, 第12号, 11-20, 2010.
- ② 中山洋子, 研究成果の看護実践への活用 順天堂大学看護学部・医療看護研究, 査読無, 9(1), 1-4, 2012.
- ③ 中山洋子, 長期入院患者、再入院を繰り返す患者の退院支援と地域生活継続支援, 日本精神保健看護学会誌, 査読無, 21(2), 90-94, 2012.

[学会発表] (計 3 件)

- ① 古橋知子, 渡邊敦子, 岩井さとみ, 大川貴子, 子どもを亡くした家族のニーズ [第1報]—闘病期間中に医療者に求めている支援—, 第40回日本看護学会 (小児看護), 査読有, 高知, 2009年9月25日.
- ② 岩井さとみ, 大川貴子, 古橋知子, 渡邊敦子, 子どもを亡くした家族のニーズ [第2報]—子どもを亡くした後に施設として行う支援—, 第40回日本看護学会 (小児看護), 査読有, 高知, 2009年9月25日.
- ③ 菅野久美, 加藤郁子, 氏家由起子, 丹治幸子, 藤本順子, サポートグループに参加する乳がん患者のQOLに関する研究, 日本がん看護学会学術集会, 査読有, 2010年2月14日.
- ④ 中山洋子, 長期入院患者、再入院を繰り返す患者の退院支援と地域生活継続支援, 日本精神保健看護学会学術集会, 査読無, 熊本, 2012年6月24日.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

荒川 唱子 (ARAKAWA SHOUKO)  
福島県立医科大学・看護学部・教授  
研究者番号: 30291561

### (2) 研究分担者

中山 洋子 (NAKAYAMA YOKO)  
福島県立医科大学・看護学部・教授  
研究者番号: 60180444  
大川 貴子 (OHKAWA TAKAKO)  
福島県立医科大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 20254485  
古橋 知子 (FURUHASHI TOMOKO)  
福島県立医科大学・看護学部・講師  
研究者番号: 30295761

加藤 郁子 (KATO IKUKO)

福島県立医科大学・看護学部・助教  
研究者番号: 00457805

清水 昌美 (SHIMIZU MASAMI) (2009年度)

神戸市看護大学・看護学部・助教  
研究者番号: 30404891

### (3) 連携研究者

大竹 眞裕美 (OHTAKE MAYUMI)

福島県立医科大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 70315670

濱尾 早苗 (HAMA O SANAE)

福島県立医科大学・看護学部・助教  
研究者番号: 80529230

菅野 久美 (KANNO KUMI)

岡山大学・医学部・助教  
研究者番号: 20404890

馬場 香織 (BABA KAORI) (2011年度)

福島県立医科大学・看護学部・助教  
研究者番号: 00341371